

身近な森を舞台とした主体的なあそび場の提案

- 子ども向け週末型自然教室の実践から見てきた「森のプレイヤー」の必要性 -

森と木のクリエイター科 森林環境教育専攻 星野 慧

1. 研究背景

子どもたちの成長に欠かせない自然体験や主体的な遊びの機会は年々減少している。ゲームやネットなど室内の受動的な遊びの普及や、授業時間の延長、塾や習い事が主な原因だ。コロナによる外出自粛で状況はさらに悪化している。必要な体験がないまま育つ子どもたちの将来が心配だ。すでに「自然欠乏症候群」が世界中で話題になっている。この問題を解決すべく、身近な森で自然体験と主体的な遊びができる週末型自然教室を思いついた。「週末に」「身近な森」での開催なら気軽に通うことができるはずだ。しかし不安もあった。自然体験と言えば特別な場所での特別な体験が一般的である中、「身近な森で勝手に遊んでいるだけ」と思われがちな体験に、子どもたちが来てくれるのだろうか。そして何もない森で主体的に遊べるのだろうか。実践を通し確かめることにした。

2. 目的

身近な森を活用した週末型自然教室の実践を通して、自然を舞台とした主体的なあそび場のニーズ、子どもたちの反応、そして身近な森のポテンシャルを確かめることを本研究の目的とした。

3. 研究の流れ

- ① 基礎調査
文献調査/現状調査
試行と聞き取り
- ② 計画と準備
- ③ 実践の結果と考察
- ④ まとめ



4. 基礎調査

4-1 文献調査と現状調査

文献からは自然体験と主体的な遊びが激減していること、そしてそれらの体験が子どもたちの成長に欠かせないことを再確認できた。またこの状況が、日本だけでなく世界的な課題になっていることも分かった。

4-2 プログラムの試行と聞き取り

リアルな参加者ニーズ把握のために、5 回にわたり小学生親子向けの試行プログラム（2 時間）を実施し聞き取りを行った（10 組 34 名参加）。その結果、「週末の方が参加しやすい」「もっと長い時間体験をした

い」という声があった。体験中、先回りして手出し口出しをする親の姿が度々見受けられ、子どもの主体的な遊びを促すには、保護者のいない空間の方が理想的だと考えた。最大の発見は、プログラム中よりも終了後の方が子どもたちの顔が生き生きとしていたことだ。何もない森の中で、子どもたちが遊びを次々と作り出す姿から、主体的な遊びを促す空間としての森の可能性を感じた。

5. 計画と準備、気づいたこと

試行プログラムでの発見や気づきを踏まえ、身近な森をフィールドとした主体的な遊びを応援する週末型自然教室を小学校 1～6 年生を対象に計画した。

5-1 フィールドの選定

候補として挙がったのが、地域の人がハイキングや散歩で訪れる馴染みの山の「ふもと」。登山には使われるものの、それ以外あまり活用されていない。でも実際には豊かな自然環境があり、主体的な遊びと自然体験の空間として適しているのではないかと考えた。

比較のために美濃市内の異なる環境の 3 つの山「古城山」「誕生山」「松鞍山」を選んだ。利用許可をもらう際、3 箇所全て所管が異なることを知り驚いた。

5-2 スタッフの確保

個々の主体的な遊びを見守るには一般的なプログラムの 2～3 倍のスタッフ数が必要だ。また過不足なく関われるスキルも必要なため、地域のプレーワーカー、森のようちえんスタッフ、自由キャンプ経験者などを配置した。週末だとスタッフやボランティアを確保しやすいこと、地元スタッフや口コミ宣伝力のある主婦がいると助かること、そして何よりも多くの人によるサポートの上で成り立っていることが分かった。

5-3 道具の準備

主体的な遊びを促すには、発想力を奪い、受け身になりがちな「玩具や遊具」は必要ない。環境、素材、そして最低限の道具があれば良いことをプレーパークの現場から学んできた。そこで今回は、ロープ、たこ糸、ナイフ、たも（網）というごくシンプルな道具を用意した。

5-4 参加費の設定

一日プログラムの参加費はひとり 5,000～10,000 円が一般的な相場だが、今回は実験と普及が目的のため参加費を下げる方法を検討した。文部科学省の「子供

たちの心身の健全な発達のための子供の自然体験活動推進事業」の助成金を活用し参加費の9割以上をカバー、参加費600円の破格で実施することができた。

5-5 駐車場&トイレの確保

駐車場や、トイレがないフィールドもあった。駐車可能な空き地の所有者を市役所や自治会に照会したり、トイレを借りて地元企業に問い合わせたりしていく中で、地域の協力や活動への賛同を得ることができた。地域とのコミュニケーションの重要性を知った。

5-6 広報

季節による森の変化を感じられるよう、一人でも多くの子供が参加できるよう、年8回開催することにした。途中からでも参加しやすいように途中参加や1回の参加も可能とした。普段活用されていない環境に目を向けてもらおうと、自然教室を「ふもとっ子クラブ」と命名。市内小学校へのチラシ配布や、メールによる過去イベント参加者への広報を行った。

6. 実践の結果と考察

心配とは裏腹に、8回の合計定員160名に対し197名の申込があり大好評。中には他市町村からの参加もあった。こうした活動へのニーズを確認できた。

<当日の流れ>

08:30 最終打合せ

09:30 受付開始(検温)

10:00 スタート

自由時間

12:00 お弁当

自由時間

15:00 解散

ふりかえり



6-1 何が起きたか～印象に残ったエピソード～

普段おとなしくてあまり喋らない1年生K君。突然「生き物を探したい!」という思いがこみ上げ、真冬の冷たい沢に入って探し始めたところ魚を発見!さらに「タモではなく手で捕まえてみたい」と川の石をめぐったり、流れを堰き止めたりと試行錯誤して魚を追い込み見事捕まえた。小指より小さな魚を大事そうに両手で持って「みてみて～」と見せにきた。穴が開くほどじっくりと観察しているうちにみんなが集まってきた。「焼いて食べてみようよ～」の声。網もトングもないので、手で持って焼いていると当然、魚は灰の中へ何度も落ちる。洗っては焼いて洗っては焼いてを繰り返しているうちに「焼いた石の上で焼いてみたら!」と新たな提案。焼き加減を何度もチェックしながら石の上で焼いた焼き魚が完成!小さな小さな魚をじっくりと味わいながら食べていたその光景が忘れられない。

「やりたい」から始まったこの一連の流れの中に、一体どれだけの「遊び」「チャレンジ」と、「学び」

「気づき」があるだろう。身近な森が「主体的な遊びの場」になった瞬間だ。そしてこの間、スタッフはじっと見守り、共に喜び、そして過不足のない関わりを心がけた。だからこそ生まれた特別な時間だ。

6-2 保護者からのヒアリング結果

自然教室実施の前後2回、保護者へアンケートやインタビューを実施した。「帰宅時の子どもの顔が生き生きしている。普段見られない顔だ。」「自然の中で好きなことを自由にできる機会を探していた」「今度は〇〇がしたい!と自分からやりたいことを伝えてくるようになった」などの嬉しいコメントが多数あった。また「異年齢による縦のつながりがあって素晴らしい」というスタッフからのコメントもあった。

7. まとめ

以上の結果から、主体的な遊びを促す週末型自然教室のニーズがあること、そして身近な森がそのための空間として充分活用できることを確認できた。

8. 今後の展望と課題

With コロナや教育現場ICT化の時代を迎え、子どもたちの自然体験・主体的な遊びは、ますます必要なものとなるであろう。自己肯定感、生きる力、免疫力、体力、集中力などを向上させるという効果だけでなく、ストレス解消、放電など心身の健康を促す効果、さらには、地域の自然を舞台に新たなコミュニティが生まれ、アイデンティティや地域愛の醸成にもつながる。

多種多様な社会問題を、地域の森を舞台にまとめて解決できる「週末型自然教室」の可能性は無限大だ。

一方で、事業展開に必要な「ヒト」「モノ」「カネ」のうち、「モノ(場所=森)」は確保できそうだが、肝心の「ヒト」「カネ」の安定的な確保の課題が残る。

8-1 「森のプレイワーカー」育成の提案

「自然」のなかで「主体的な遊び」を応援するには、森や自然に関する技術と、子どもの主体的な遊びを促す技術の両方を持った指導者(プロ)が必要だ。しかし日本ではあまり見かけたことがない。イギリスでは子どもの主体的な遊びを応援する専門家としての「プレイワーカー」の国家資格や大学のコースがある。また、森を伝える「フォレストスクール」という教育システムもある。この2つを掛け合わせたような「森のプレイワーカー」の育成と職場の創出を提案したい。

8-2 森林環境税/地元企業スポンサー/塾連動型

週末1日1万円の参加費の自然教室では経済的に恵まれた子どもしか体験できない。「森を舞台に」「未来の人材を育み」「森も地域も社会も生まれ変わる」と言う切り口を考えると、これこそ「森林環境税」など公的資金を活用して指導者育成と同時に展開すべき活動と考えている。他にも地元企業のスポンサー制度や平日型・塾連動型などの仕組みも検討していきたい。